【令和6年新年職員訓辞】
新年明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い致します。

まず最初に、年明け早々、能登地方の大地震、羽田空港の事故、そして1月3日には、鳥町食道街が火災に見舞われ、辛いことが重なりました。被害に遭われた方、未だ不安な状況に置かれている方に、一日も早い復旧復興を願うとともに、心からお見舞いを申し上げます。
併せて、正月返上で、情報収集等に当たってくれた危機管理室、懸命の消火活動に当たってくれた消防部局、区役所など関係の職員各位の尽力に感謝申し上げます。

これらの災害や事件事故を目の当たりにするとき、改めて、人の命と「いつもどおり」の暮らしの尊さ、それを支える人の想いと繋がりの大切さを感じます。
そして、いついかなるときでも、市民の皆さんとともにあろうとする、私たち公務に携わる者の責務と使命を痛感します。
災害や事件事故は、常に“他人事”であってはなりません。改めて、市民の皆さんの暮らし、不安、そして喜びに想像力を働かせ、常に寄り添い、時に背中を押すことのできる「行政」の姿を共に追究していきたいと強く思います。

思うに、私たちのまちを築き、支え、回してくださっている市民の方々の多くは、「もの言わぬ大多数の方々」、つまりサイレント・マジョリティの方々であることを忘れないで欲しいと思います。
毎日を一所懸命、堅実に働き、生活と家族を守り、多少の不満や不平があっても口に出さず、役所や政治家と繋がる機会も少なく、それでも、毎日を力強く生きておられる多くの市民の皆さん。
そんな市民の皆さんの想いや声なき声に応える、明日への希望が湧き立つような市政、行政を今年も展開していきたいと切に思います。

さて、昨年一年を振り返ると、怒涛と激動の一年だったと思います。
昨年2月、私自身、新たな市政の舵取り役としての責任を預からせていただきました。
16年ぶりという市政の転換、新たな挑戦の始まりを支えていただいたことに心から感謝します。
新たな市政には、当然、多くの波風も立つものだが、今、北九州市政の新た

な船が帆を張り、風を掴み、ようやく前に進み始めました。
年末年始に、市民の方々と会話する機会があったが、「間違いなくまちの空気が明るくなった」「市役所の皆さんの動きが前向きで素早くなった」などといった声をいただいたことは、本当に嬉しく思います。
本年も、北九州市の未来に向かって、叡智を結集し、新たなビジョンづくり、市政変革、令和6年度予算など、懸案は多くあるが、勇気と自信をもって、堂々と道を進んでいきましょう。

さて、今年令和6年全体を見通すと、どのような一年になるでしょうか。
世界を見渡せば、ロシア・ウクライナ戦争、中東での戦争が依然続く中、1月に台湾、11月に米国で総統や大統領を決める選挙があり、中国経済は減速傾向を見せるなど、激動は続きます。世界とつながる経済構造を持つ私たち北九州市にとっても、様々な影響が予想され、予断を許さない状況にあります。
国内を見れば、4月には時間外労働の上限規制の猶予期間が終了し、いわゆる「2024年問題」に直面し、物流、建設、医療といった業界での「供給力不足」が懸念されます。行政も一緒になって、各産業分野における波を乗り越えていかなければならなりません。
このほか、6月には所得税等の減税、10月には現行保険証の廃止など市民生活にも影響の大きな政策テーマが控えているほか、12月には、TSMCの熊本半導体工場が稼働予定となっています。

こうした中、北九州市においては、まずは、令和6年度予算編成、新ビジョンの実現と市政変革に向けての歩みを進める一年としていきます。
具体的には、空港、半導体、観光などのポテンシャルをどう具体的な形にしていくのか、子育て・若者を支える環境づくりをどう進めるのか、新ビジョンに基づく都市の改造をどう構想していくのか。北九州市の未来への挑戦の種は数多あり、貪欲に、野心的に、そして明るく、取り組んでいきましょう。

ここで、今年令和6年の市政全体の基本姿勢としてのスローガンを設定したいと思います。
今年のスローガンは、「物語を創ろう」です。

昨年末、就職10年前後の若手職員の方々と話す機会がありました。その中で、ひとりひとりに、自己紹介を兼ねて、これまで挑戦や苦労の経験を語ってもらいました。

そこでは、職員の皆さんが、例えば災害の現場や民間企業に派遣され、そこでもがき苦しみながら、成長を実感した、そして自信を手にしていったという「物語」が多く語られました。
失敗を恐れず、自分自身にチャレンジしながら、新たな自分を見つけ、市政に貢献していこうとする彼ら彼女らの姿に感銘を受けました。

このように、「物語」こそが、人の心を揺さぶり、私たちに力を成長を与えてくれるものです。
まさに、新たな市政は始まったばかり、これから、「物語」が始まります。
新たなことを始める過程、これまでのことを変える過程では、希望とともに、葛藤や苦悩もあります。「うまくいかないこと」もあります。
しかし、それでも、すべては「物語」になるのです。
光と影、試練と支援、組織全体の様々な経験が、すべて「物語」になります。
例えば、新しい政策を動かそうとすれば、毀誉褒貶がつきものです。それは市役所の外でも、役所の内部でも、様々な摩擦が起きる。あるいは、思わぬ賞賛や後押しを伴うこともあるかもしれません。
しかし、それらすべてをひっくるめて「物語」になります。いつか振り返ったとき、喜びも悲しみも「物語」になるのです。
そして、「物語」が、市民の皆さんの心に火を点けていくのです。

その際、本当に意味のある「物語」になるかどうかを決めるのは、私たちが、市民の皆さんを、北九州市の未来を、共に働く仲間たちを想えていたかどうかに尽きるのではないかと思います。
私を含め、職員のひとりひとりが動き、気高く、真っすぐに、この街の人と未来と仲間を想って行動したとき、いつかそれは「物語」として私たちの心とまちに残る財産になると信じています。

私たち公務に携わる人間は、まさに「未来に尽くす」ために公務員になった、市長になりました。自らの力でこの街に最も貢献できる立場として、この職を選び、集ってきました。
その喜びと責任の重さを味わい、愉しみつつ、新たな時代の「物語」を共に創りましょう。
その先頭には私が立ちます。一致団結して、時代の荒波を超えていく北九州市を共に創って行きましょう。

「できない理由ではなく、できる理由を創る」

「北九州市から日本を変えて行く」
その思いをさらに強く抱き、子や孫たちに誇れる北九州市を創りましょう。
令和6年が、市民の皆さんに、そして私たちすべてに実りある、前向きな一年となるよう、力を合わせていきましょう。
皆さん、本年もよろしくお願いいたします。